

研究課題（テーマ）		環境倫理と動物倫理の関係を考える ——日本在来馬に着目して——	
研究者	所属学科等	職	氏名
代表者	教養教育センター	准教授	石田知子
分担者			
研究結果の概要			
環境倫理学と動物倫理学は、ともに、人間以外の生物に対する道徳的な配慮についての考えを展開してきたが、これらの間には無視することのできない根本的な相違がある。動物倫理学では、人間以外の動物にも有感性、すなわち苦痛や幸福を感じる能力があることから、彼らに対するしかなるべき道徳的配慮が必要だと考えられている。さらに、「人間ではない」という理由のみから、動物の苦痛を軽視する態度は「種差別」であるとされ、道徳的に望ましくないとされる。一方で、私たちが「自然保護」あるいは「環境保全」というとき、守るべきものとして想定されているのは個々の生物ではなく、生態系など、個々の生物を含んだ全体としてのシステムである。動物も保全すべき対象であるが、それはあくまで「種」としての動物であり、「個体」としての動物では必ずしもない。そのため、現在の環境保全の現場では、全体としてのシステムを維持するため、侵略的外来種や増え過ぎた在来種などの動物個体に対し、致死的な処置を行うことがある。もちろん、そのような現場の関係者の多くは、動物を殺処分することに対して様々な葛藤を抱きつつ、それでもやむを得ない処置として実施している。しかしながら、「種差別」という観点から動物個体に対する配慮を求める場合、そのような処置に対しより厳しい態度を取ることになる。 以上の相違は、それぞれの立場の根幹にかかわるものであり、容易に解決できるものではない。さらに、理論的なレベルでの対立だけでなく、実践のレベル（すなわち、環境保全ないし自然保護活動と、種差別的な動物搾取の廃止を目指す動物開放運動）においても、無視できない相違が存在する。環境保全や自然保護においては、地元の理解を得ないまま活動を進めるのは現実的ではないとして、対象となる地域のステークホルダー間で価値観のすり合わせを行うことが望ましいとされるが、大前提となる「地球環境を大切にすべき」という理念は、現在では広く社会に共有されている。それに対し、動物開放運動は、現代の工場畜産（生産効率を重視した食肉生産方法）に代表される「種差別」的な行為を廃止させることを目指している。「種差別の廃止」という理念は、現代社会において広く合意を得られた考えではなく、動物開放論者たちの描く大きなヴィジョンは、社会全体で共有されているとは言えない。そのため、彼らは社会に対し、根本的な意識の変革を迫ることになる。この違いは、両者の対立を際立たせる。現段階で対立を完全に解消することは困難だが、両者が妥協しうる点により近づけるよう、理論そして実践の立場から、これらの対立を解きほぐすことが求められている。 本研究では、その鍵となるのが日本在来馬であると考えている。中でも重要なのが、ほぼ野生と言える方法で飼育されている御崎馬（宮崎県）である。動物倫理学の主要な立場から見たとき、現在の御崎馬のありかたがどの程度まで理想的と言えるのかを検討し、個別事例における動物倫理と環境倫理の妥協点を探っている。			
今後の展開			
現在、本研究の成果をまとめ、論文を準備している。また、今後は、ウマだけでなく、他の動物（シカ、サル、クマ、ニワトリなどを考えている）を具体例として、分析を続ける予定である。			